

北九州の万葉歌

若松区 伊藤 頼行

小倉北区の新勝山公園「万葉の庭」に六首の万葉歌碑がある。万葉仮名の本碑と、現代表記の副碑を添えた、自然石の立派なもので、市の中心部にあって、多くの市民に親しまれている。

昭和四十六年一月設置の「万葉の庭」建設要旨は「北九州市の海岸は、小倉は企救の長浜または高浜、戸畑は飛幡の浦と呼ばれた。この白砂青松の美しい海岸は、遠く万葉の昔から太宰府に往来する貴人、防人、旅人達の心を慰め、美しい自然の織りなす抒情に大いなるロマンの想念を燃やし、心あたたまる数々の歌を残した。この海岸一帯はいまや近代化し昔を偲ぶよすがも無いが、古代万葉の詩情を現代に生かして市民の魂の故郷を再現するため、この地にゆかりの万葉歌六首を選び、これを碑石に刻み、市民文化の広場として「万葉の庭」が建設されることになった。」とある。

この庭と歌碑を見るたびに、私は今一つ気にかかる忘れられた万葉歌がある。そしてまことに気ぜわしい言い方だが、結論を先に述べるならば、その歌碑を響灘を広く展望できる若松区岩屋の遠見ヶ

鼻台上に建立することが最もふさわしいのではないかと……。

万葉集の編者として最も有力視されている大伴家持の父であり、万葉の隆盛期にあって山上憶良とは太宰帥の時代に深い親交があった大伴旅人が、「太宰帥兼任で大納言に任ぜられ奈良の都に上る時旅人自身は陸路、従者達は別に海路を取って上京することになり、そこで旅を悲しむ傷んで、各人思いを述べて作った歌十首」との詞書がある歌は、万葉集巻第十七の冒頭に見えている。十首の中、四番目の歌である。

○我が背子を我が松原よ見渡せば
海子娘ども玉藻刈の見ゆ
○荒津の海潮干潮満ち時はあれど
いつれの時か我が恋ひざらむ
○磯ごとに海人の釣舟泊てにけり
我が舟泊てむ磯の知らなく
○昨日こそ舟出はせしかいざなり比治奇の灘を今日見つるかも

（作者不詳）以下省略
〔訳〕昨日船出したばかりで
今日は響灘を見たことだ
先述の「万葉の庭」の六首は小倉、戸畑と明確な海岸を歌っているのであるが、この「昨日こそ」は比治奇の灘（響灘）のため、い

ささか拡がりがある海であるため歌碑の対象になりにくいものであったのだからとも考えられる。ただ、「日本古典文学大系（岩波書店）」の注釈欄の「（比治奇の灘）は山口県豊浦郡の西方、小倉市、若松市の海面。また兵庫高砂市の海面とする説もある。歌の順序からは後説の方が穏当か」とあるので、採択にあたって躊躇があったのではあるまいか。

しかし「歌の順序からは後説が穏当」に私は大いに疑問がある。前述の二番の歌の「荒津」は同書大系も「福岡市西公園の地、当時の舟着場」とあり、又日本古典文学全集（小学館）では、「昨日こそ舟出は」の注釈は、「この舟出は筑紫出発をいう」とある。当時の舟の航路行程としては兵庫県沖までは遠く、丁度響灘が適切な解釈ではあるまいか。

昭和四十四年刊「万葉と九州」の著者中村行利氏は「（ひぢききの灘）は響灘であろう。東は若松区

北九州市民憲章（昭五六・二・一〇制定）
緑を豊かに、清潔で美しいまちにします。
ままりを守り、安全なまちにします。
人を大切に、ふれあいの輪をひろげます。
元気で働き、明るい家庭をつくります。
学ぶ楽しさを深め、文化のかかえるまちにします。

の沖から西は宗像郡の鐘の岬あたりまでが海域で、それから西は玄海灘である。これを兵庫県の響灘とする説もあるが、北九州であろう。私注に（荒津を出航すれば、神湊か津日あたりで一泊し、金崎を過ぐれば響灘の域であろう。播磨にも同名があるが、それではキノフを詩的強調と見るにしても、日程が合わない。）といっている。北九州説はこのほか、地名辞書、地理考など少なくない。」と書かれ、又福岡県高等学校校国漢部会発行「郷土の文学」―北九州編―昭和五十三年刊で「古典編」―若松の部―にこの歌を掲げている。

又昭和五十四年西日本新聞社刊「筑紫万葉散歩」著者片瀬博子氏は「響灘」の項でこの歌をあげ、若松北海岸の展望を指している。「万葉の庭」に賛意と敬意を表する私の心の中に、この歌を響灘に突出し、近世まで番所さえもあつた、あの展望の良い岩屋の遠見

ケ鼻台上に、歌碑として蘇らせなければ「画龍点睛を欠く」と言ってしまうのは過言であろうか。

役員変更紹介

戸畑区役員中十一月より次のように変更されました。
支部長 小島 忠一
（旧 常任理事）
常任理事 福田 安敏
（旧 支部長）

事務局だより

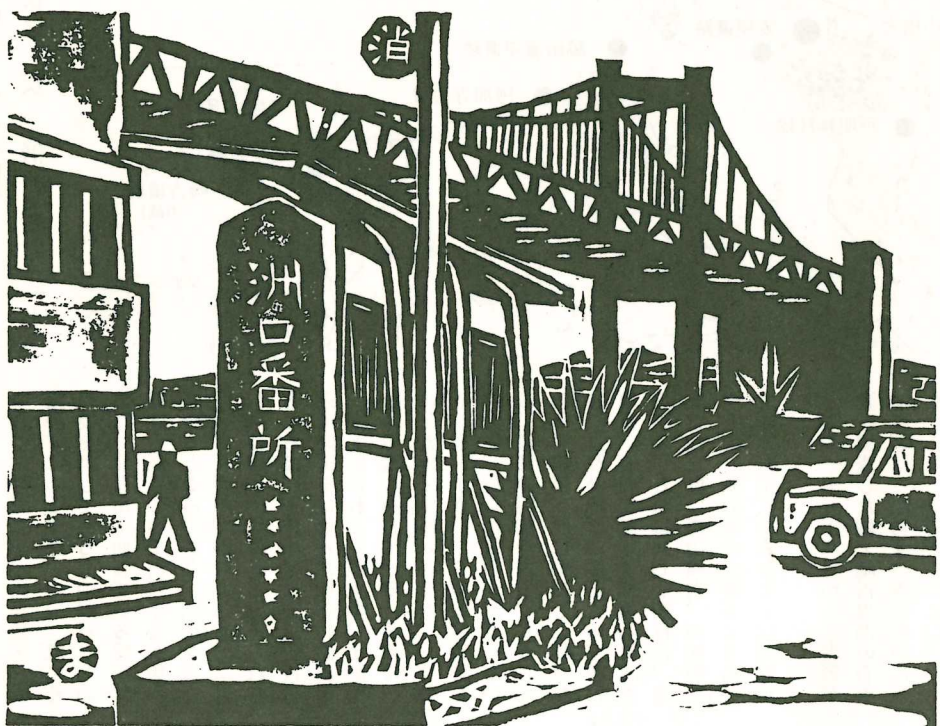
◆会報三十四号をお届けします。
今回は若松支部担当です。
◆今回は小倉北支部担当で、発行は六月の予定です。
◆会員の自由投稿を歓迎します。
◆親しいグループ等に本会を紹介し新会員勧誘にご協力願います。
◆年度末が迫りましたので年会費未納の方は早目に納入願います。
一般会員 千円
賛助会員 一口 一万円
学校関係 千円
一般団体 三千円
◆会員名簿整備のため、会員の方で住所や電話番号の変更の向は早目にご連絡願います。
◆「北九州市の文化財」近く発刊B五、一〇四頁、頒価六〇〇円
希望者は早目にご予約願います。

No. 34 56. 2. 15

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区城内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389
振替口座番号 福岡393
印刷 吉田印刷株式会社
北九州市若松区浜町一丁目19-1
電話 761-5424

北九州市の文化財を守る会

会報



洲口番所跡

片山正信氏の「版画若松百景」より

渡船の発着毎に忙しげに集散する人々が通り抜ける、若松渡船場前広場「洲口公園」北側一角の本町筋に、洲口番所跡のみかけ碑が解説板と併設されている。

関ヶ原の戦功により黒田長政は筑前を賜わり、五十二万石の大名として慶長五年名島に入り、福岡本城をはじめ六端城を慶長十二年までに築城した。長政は遠賀郡若松城（洞海の中之島）に黒田二十五騎の一人三宅若狭家義（三千六百石）を守将として配した。洞海湾口の最もくびれた部分の島にある若松城の対岸若松側、今の渡場前に洲口番所と、その北側海沿いに御船手の両役所が設けられた。共に三宅若狭代官の下に、藩境に近い水域の要路として備えたものである。

御船手は福岡藩の海上国防警備にあたるもので、初め石井船司、明和二年に坂尾船司を加え、交代年番勤務し、五十八挺を初め大小小早を備え、船頭町一郭内に舟子四、五十戸を擁していた。洲口番所は上方に通ずる海上交通の要衝として船舶の往来繁く、昼夜三人宛詰切りで出入人物の検閲や、禁止の輸出入穀物、雑貨の調査取締りに当たった。

幕末までの海難救助、密貿易、異国船の沿岸測量、関門異変等に備えての沿岸警備や、若松、戸畑、黒崎、川筋との諸紛争解決等国防、経済、民生安定に両役所の功績は大いなるものがあつた。旧「若松市史」は若松市市政施行二十周年記念事業として、昭和十二年に発刊されたが、その編集は当時市視学の有馬氏により全編の完成をみた。史実に精通した有馬氏は、昭和十三年若松市教育会の二十五周年記念事業に、同会の副会長の立場から史跡記念碑の建設を建言して具体化された。

洲口番所、小田山古墳、烽火台、朝鮮鐘、魚島池の五個所のみかけの碑である。碑文の達筆な筆跡は当時浜町小学校校長横溝義明氏の推した小田精、橋山義雄両先生によるものであることが最近判明した。両氏ともご健健で今猶精進されている。

今や碑の周辺は大小のビルが建並び、朱の大橋が大きな弧を描いて戸畑とつながり、その橋下、若松城の島は削りとられて戸畑埠頭と化している。島の跡は広く航路として大は一万噸の船舶が往来している。大身の黒崎代官も三宅代官の許可なく通航出来なかつたという藩境の緊迫した厳しい取締りや、海路をとる秋月藩の轍轡を張り大小毛槍を立て、太鼓を打鳴らして通過する絢爛豪華な船列は盛観であつたと伝えられる往時を回顧して、今昔の感深いものがある。

碑石はいつまでも昔語りを伝えることであろう、先覚者有馬氏と若松市教育会の貴重な遺産に深い敬意を表したい。（藤田 敏夫）



火の玉塚古墳遠景



火の玉塚古墳頂部露出石材



火の玉塚古墳全景

から、阿加寺と称していた寺院の跡に古墳が破壊され、使用していた石材を積んで写真のように地蔵尊を祭っている。このことから、残存の一基は、城ノ崎古墳との類似性から、今後の調査に期待される。この地域は、官有林であるため、損壊される心配はない。

明治、大正、昭和と三代に亘る石炭産業も昭和三十年頃から斜陽の蔭が濃くなり、筑豊炭田の石炭最大の集散地として国の内外まで知られた、若松区藤木貯炭場は、現在雑草と芥捨て場の廃墟と化している。東洋一のガントリークレーンが年間五〇〇万屯さばいた栄光の夢はもう返って来ない。

きた古老の憶い出は尽きない。最年長は沢田モトエさん、明治二十六年生まれ八十一才。出身は高知県。人に囁かれ土地も家も人手に渡り、六尺一本で飯が食えると言う若松に大正四年頃に来た。

お茶を飲みながら、手振り身振りで楽しく語り合うのを筆記に、テープに録音したが、現在三人共すでに他界された。お三人のご冥福を祈り乍ら稿をまとめた。



昭和38年頃の新棧橋風景

古老の語る藤木石炭仲仕

若松区 森川 政美

おり内部も荒らされていると想定されるが、石室構造等において興味深いものがあり、安屋一帯の豪族の墳墓ではないかと思われる。亀ヶ首横穴群は、北部丘陵の奥深く、海岸に迫ったところに八個残っている。森山、戸明神社の横穴は、それぞれ一ないし二しか確認されていないが、森山横穴は、

今後再度調査する必要がある。以上、脇田付近古代遺跡の概況を述べたが、地域性から、現況では、これらの遺跡は保存できる可能性が強いと言える。開発の手がどの程度侵入してくるかわからないが、地域の人々や市当局のご努力によって、脇田付近の文化遺産の保護を切望して止まない。

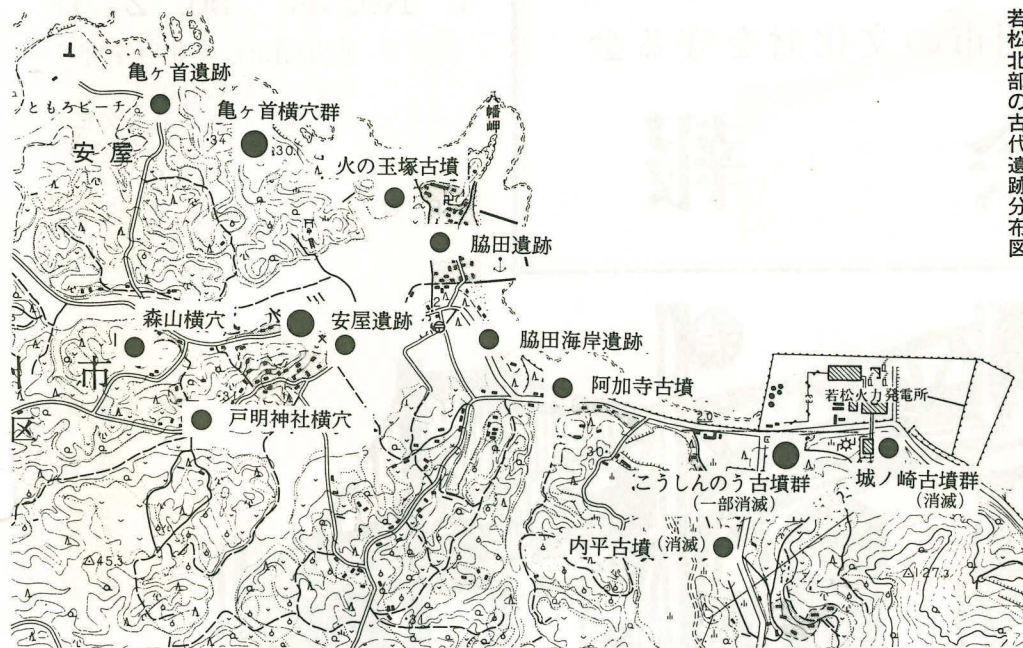
沿革

明治二十九年五月、藤木岬の山から和川の海岸線に木造高架棧橋三五六米が完成、十個の積込漏斗(じょうご)があった、これが藤木における石炭荷役の始まりで、若松埠頭から古前、藤木と荷役の線が西に延びた。日露戦争の好景気により石炭の需要が増し、藤木は筑豊炭田の石炭を一手に引き受ける集散地となった。その後明治三十五年、大正四年、昭和十五年と棧橋の延長及び改修がされた。昭和五年七月東洋一を誇る長さ一〇〇米のガントリークレーン二基が新設され、益々石炭荷役の能率を上げる事が出来た。

破壊から守りたい 若松北部の古代遺跡

若松区 安倍 芳一

若松北部の古代遺跡分布図



若松区の古代遺跡は、他区より比較的破壊を免れているように見える。しかし、最近開発が進むにつれて、洞海湾岸、西部地区、響灘沿岸にある遺跡の中で、既にその姿を消しているものが目立ち始めた。北海岸に面している脇田付近は、区内の中で古代遺跡が集まっているところであり、旧状を残しているものが、かなりある。(分布図参照) 住居の跡と考えられるところは、花房小学校安屋分校付近の県道をはさんだゆるい傾斜面等が多数散布している。そのほかに三か所の遺跡があるが、いずれも規模が小さい。この安屋遺跡を中心に、周辺に古墳が点在している。東部の阿加寺古墳、こうしんの古墳群、既に消滅した城ノ崎古墳群及び内平古墳と火の玉塚古墳は、石材で墓室を構築した古墳である。これに対して西部は、亀ヶ首横穴群、森山横穴、戸明神社横穴は、砂岩質の丘陵をくりぬいて作った横穴であることは興味深い。



こうしんのう1号墳石室

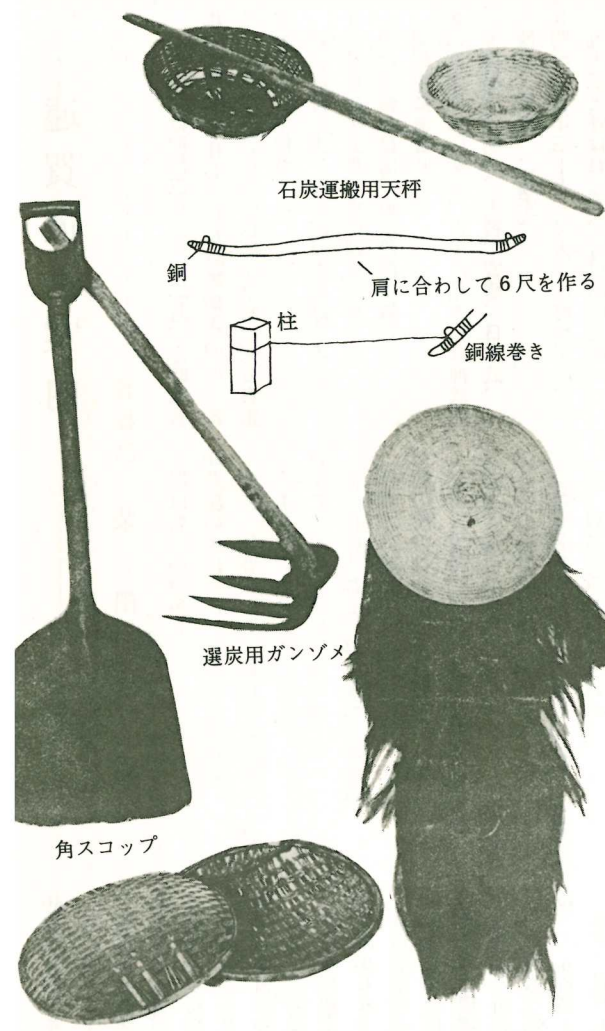


こうしんのう1号墳全景



阿加寺地藏尊

発電所の施設拡張工事のため、こうしんのう1号墳を緊急調査をした。写真のように墳丘東側に盛り土の流出を防ぐための石を巡らしていたことがわかった。石室の前部は発見当時から欠失していた。こうしんのう古墳群の一次調査の結果をまとめた第一集(図録篇)は、小田富士雄氏によって出版されたが、第二集は筆者の責任で出版されなかったことは、今考えるに残念であり申し訳ないことである。こうしんのう一帯からの出土した遺物の整理と調査のまともを急ぐべきであることを痛感する。内平古墳は横穴式石室であり、三基あったが庭石に販売された後消滅してしまった。阿加寺古墳は、脇田海岸に迫った丘陵上に一基残っている。墳丘表面に石材が露出している。古く



石炭仲仕着用蓑

同じ金鎖で腰から下げ幹な姿をしていた。のちゴルフズボンをはく者もいたが、昭和十二年頃より既成作業ズボンの大量生産により作業ズボンをはく様になった。戦時中、軍隊などが使用の巻脚絆(ゲートル)をつけたが、戦後足首だけ布で巻く様になった。

腰巻 女は年令に合わせてネルの柄腰巻(オコシ)を腰にまといその上にみじかい作業着物、その上から白帆布綿の前掛をする。

女の作業は入れ鎌で前が特に傷み、前掛なしでは作業が出来ない。

手甲、脚絆 昔の旅人は男女共手甲、脚絆を付けた様であるが、仲仕の手甲、脚絆は女の専用で男

は付けなかった。紺の木綿の生地で作った。のちゴルフズボンをはく者もいたが、昭和十二年頃より既成作業ズボンの大量生産により作業ズボンをはく様になった。戦時中、軍隊などが使用の巻脚絆(ゲートル)をつけたが、戦後足首だけ布で巻く様になった。

外被 雨の降る日は蓑を着た。蓑製と、しゅる製があり、後者の方が軽くて強かった。戦後ゴム雨ガッパを使用する者が多かった。

仲仕の生活

明治の中期、六尺一本持てば飯が喰えと、愛媛、高知、香川、山口、大分、佐賀、長崎と各地から出稼が藤木に集まった。お国訛りの方言が面白く聞かれた。馴れ

ぬ仕事でこみやられ(いじめられ)辛棒して仲仕長屋に住込まれる様になれば上々の生活であった。夫婦共稼ぎが多く子供五人や七人の家庭が普通で、特に女は仕事から帰って炊事、洗濯、育児と大変な負担であった。上の子は赤ちゃん(守り)をしながら学校に行った。若い夫婦など、赤ちゃんを仲仕小屋に寝かせ、仕事のすき間を見て乳を飲ました。これら共働きの人々の生活を保護するため、昭和十一年藤木十二番に興仁保育所が、吉田磯吉翁の寄附で建てられた。男達は宵越の金は使わないと云う気風があつて、酒を飲み、バクチをする姿をよく見かけた。

作業用語

作業用語は作業の仕方によっていろいろと変化するもので、その言葉の中から当時の作業内容を知ることができる。

また、作業用語も仲間だけしか通用しないものもある。「今日はごんぞうに行つた」は、仲仕仕事に行つたと言ふ事である。

瀧取り 船から炭を移す事

入れ鎌 ガンゾメで石炭をザルにかき込む作業で女の仕事。

一本一本 女一対男一の組合せで、女が石炭をガンゾメでザルに入れ、男が担ぐのである。

一肩 荷下し距離の近い場合男が一名、女が二名の組合せのこと。

あゆみ先 下から上にあゆみ(三〇〇程の長い踏板)を掛けその上で作業している者(担ぎ方男)。

あゆみ下 あゆみの下で作業している者(入れ鎌女) 地盤の石炭が減るほどあゆみの位置を変えねばならぬ、急に変えると登り下りする者が転落するので、知らず知らず位置を移動するのが、あゆみ下の腕の良さと言ふ事になる。

横グワ あゆみ両側の作業者。

一屯 石炭一屯の事で、中塊炭で十六荷、塊炭で十五荷あつた。時にはカンカンで計る事もあり一屯は仕事量の目安である。

天秤秤で、男の自分持ちの作業用具

六尺 ろくしゃくは荷をかつぐ

天秤秤で、男の自分持ちの作業用具

子方 常備を子方と言ひ、親方の家に下宿、又は親方の長屋に住み、親分と子分の間柄が生れる。

道具番 現場仲仕小屋の道具整理と点検をした。道具にも使い良いのと悪いのがあつた。好きな道具に印を付けて借出の便宜を頼む女仲仕が多かつた。

当番 部屋のは当番を決め、人より早く出勤して、水汲み、お茶沸し、小屋掃除などをした。水道の無い時代には、たご(桶)を担いで五〇〇米程ある山坂の大池谷まで清水を汲みに行った。

作業服装

パッチヨ傘 夏は日除、冬は風雪から身を守るため男女共、パッチヨ傘を被つた。他地方出身が多かつたので傘の呼名もまちまちで、タコノバチ、タツコロバチなどと言つていた。男は日本手拭をねじ鉢巻してその上にパッチヨ傘を被つた。後、麦藁帽子を被る者もいた。女は糊付の日本手拭を斜に折つて、庇状に前髪の前に出し、その上から姉さんかぶりをしてあごの上で結ぶ。その上からパッチヨ傘を被る。糊付手拭を庇に使つたのは昭和三十年代で、それ以前はその様な事はしなかつた。

衿前 女は日焼と炭塵を防ぐため、日本手拭を首の後から前に廻し胸元に押込んだ。戦後白布で当て子を作り衿開を覆い首の後で留止めた。女は頭に二枚、衿に一枚、手拭一枚と朝仕事に出る前に四枚の日本手拭を用意した。

上衣 男は木綿結衿シャツ、冬はメリヤスシャツを肌着にした。その上に紺の腹掛を付けて、組名人入りの印半てんをはおる。女は木綿綿の着物、ツツポ袖、着丈みじかく膝下まで。下帯の上から十センチ幅の角帯をしめる。

下衣 明治頃は紺のもも引パッチ、大正頃綾織木綿パッチ、昭和期タンクズボンが流行、親方連中は白のタンクズボンを脚に吸い付いた様にと洋服屋に注文した。五个から八個の釦で止め、金時計を

一次世界大戦の頃だつたと言ふ。若者上げての酒盛りが続く好況で、石炭成金、船成金が続出した。安川、松本両家を初め、のちに東京都に上野美術館を寄附した佐藤慶太郎氏や、のちに国際通運社長となり、日本通運の設立に尽した中野金次郎氏を生んだ。

ガントリークレーンの出現によつて仲仕の仕事が大幅に狭められ、第二次世界大戦後一時盛り返したが、昭和三十八年頃からの石油へのエネルギー革命により、昭和二十六年、年間五〇〇万屯掘っていたクレーンも四十五年には五万屯と衰微の路を辿り、石炭業者の廃業が激増した。昭和四十七年、ガントリークレーンの解体により藤木地域七十七年間の石炭荷役に終止符が打たれた。

石炭仲仕の職種

ゴンゾー 石炭荷役作業員を総称してゴンゾーと呼ぶ。若松、藤木地域の特異な呼び名である。語原は詳かでないが、石炭荷役の始め頃、若松埠頭より伝わり、権造と言ふ人が初期荷役に居たのではないか、と言われている。

陸仲仕 岡仲仕とも呼ぶ。炭車から下した石炭を貯炭場に運び積み上げる。又は貯炭場に積上げた石炭を船に運ぶ。貯炭場は各商社により場所が決めてられてあり、船も商社専属が決つている。

沖仲仕 沖に停泊している船に

石炭を積込むのを沖仲仕と言ふ。沖の本船(汽船) 専門に積込むのを本船仲仕と言ひ、主に若松南海岸通りの組が作業した。玉井組など、葦平先生の小説「花と龍」的な作業の掛引があつた。

棧橋仲仕 高架棧橋上の炭車の底を切つて船に石炭を落す作業、危険な仕事で腕を炭車にはさまれて切断する事故が多かつた。

荷後取 ニゴトリと言ふ。棧橋のジョーゴや、船の荷卸しの後凌えをする作業。

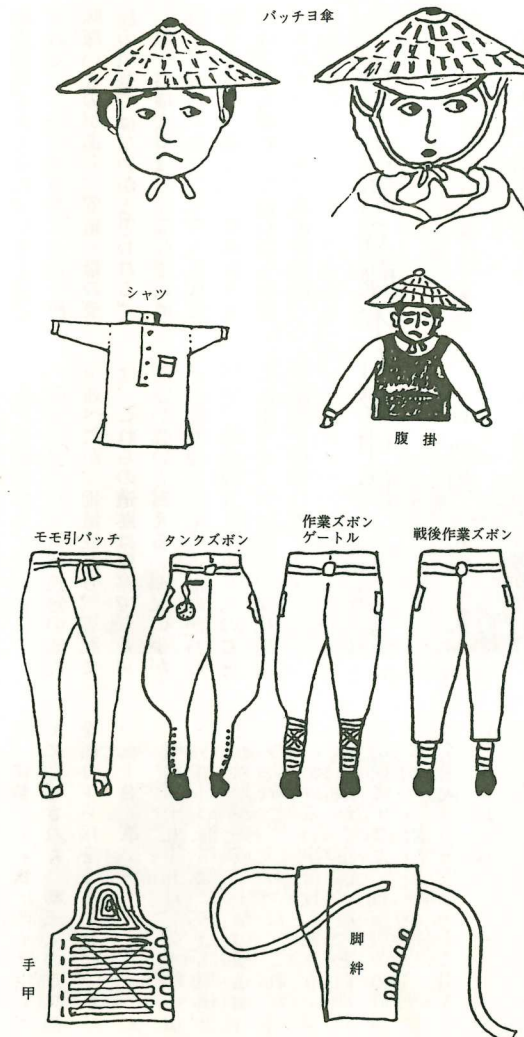
石こぎ 船に石炭を積込む際、海にこぼれ落ちた石炭を、長い竿の先に網を付けたものですくい上げる作業。

杭木仲仕 石炭に付随した作業で、炭坑に送る杭木を定寸に挽き切り貨車に積込む作業で、杭木を担ぐ役を杭木担ぎと言ひ、鋸で挽き切る役を杭木切りと言つた。新棧橋東部に田宮組があり、昭和二十年の米軍空襲で山積の杭木が火を発し黒煙空に沖したとか。

組の組織

親方 子方二、三十名で組を作り親方の姓をとつて〇組と言ふ。組統率の親方は仕事の段取りをつけ、子方から「おやじ」と愛称されて組の結束は堅かつた。

ボーシン 親方の片腕となつて仕事量により作業員を集めた。部屋者(常備)の足りない時は他の組から臨時に備つた。備われた者



遠賀道々案内

若松区 柴田 六郎

この一篇は明治三十五年十二月、当時遠賀郡若松町に居住していた林繁樹氏の作である。当時の遠賀郡内の状態を推察出来る貴重資料として掲載する。

紙面の都合上一部市域外を省略する。

1 元筑前は十五郡、中に遠賀は最大郡、西は宗像北は海、東は豊前に隣して、南鞍手に境せり。

2 抑々此地に行幸の、古書に見えしは神武帝仲哀神后齊明や、天智、安徳、日本武、懷良、嘉仁、二親王。

3 明治の初年三十と、又大小区村かずは、九十三と呼ばれしを、町村制の実施にて、十九とこそはなりにけれ。

4 境内開け土地広く、平地つゞきて山遠く、河の運漕亦宜くて、名所旧跡いと多し、いざ行き道のしるべせん。

5 先ず中央の折尾駅、鉄道交叉の便ありて、郡衙議事堂事務所や、銀行支店に郵便局、戸口は日々繁昌す。

6 此れより西へ十四丁、浅川温泉浴場は、浴舎の構造美麗にて、園地草木はなやかに四時の眺めも亦よろし。

7 西に日峰、隣には、麻生の城趾過ぎ行きて大君山を弔へば、安徳帝の行在所、袂に露をおきそひぬ。

8 山鹿の城主秀遠の、雄々しき跡も麻生氏の居城となりぬ是さへも、今絶えたれど眺望は、昔のまゝに佳絶なり。

9 山鹿は古書にも顕れて、山鹿の岬洞山や、狩尾板橋石橋は、今はなけれど浪懸の、

岸は名所の歌多し。

10 芦屋の里は古に、神武天皇東征の時、一年にまじし、岡田の宮のありし跡、今も社はいかめしき。

11 又この町は水荖の、戦いありし跡にして、世にも名高き芦屋釜、垂間の橋はくち果てて、只名のみこそ残りけれ。

12 此につゞける松原は、昔神功皇后の、風を防せがためにとて、植ゑさせ給ふといひ伝ふ、垣前郷は此処ぞかし。

13 西に向ひて行く程に、糖塚黒山松原や、矢矧の川は神后の、矢矧がせ給ふ所とぞ、此処より原は程近し。

14 平砂連なる内浦浜、名切りの駅の跡跡へば此処ぞ寿永の古に、平家幸府に落ちのびてあわれ涙を垂見越え。

15 枝光山は人皇の、七十三代冷泉の、御代に比叡山の了空が、渡唐伝法帰朝の日創立せし法応寺。

16 須藤重行再興す、天文十五年この寺に、麻生隆守自殺せり。

17 波津は古神后の、三つの韓国伐ちますと、旗立て給ふ名にぞよる、事越えましし大蔵の、神池の水は猶清し。

18 75 尾倉大蔵枝光の、この三村は昔より、八幡神を祭るゆえ、今は合せて盛大な、町の名とこそ成りにけれ。

76 此処に本邦唯一の製鉄所こそおかれけれ、其の盛大は禿筆の、及ぶ所にあらねども、まずあらましを書きてみん。

77 製鉄鋼製品や、工務の四部分に分たれて、鉄道電気は更に又、烟突空に聳えつゝ、一般設備はやや成りぬ。

78 今より後の盛況は、刮目してぞ待たれける、進歩に心あらん人、伝を求めて一度は、其の拝観を願へかし。

79 皿倉山の麓なる、中の河内や田代郷、皆大蔵の幽谷中、佳境の地に中原と、共に豊前の国境。

80 世にも稀なる中原の、孝子安田の休伯と、森の惣市ぬしこそは、親に真心尽しけれ、その善行をならへ人。

81 戸畑の町の天願寺、菅相公の古蹟とぞ、名護屋の崎は眺望の、世にも稀なる勝地にて、生海鼠郡真島。

82 河内島今中島と、呼びてコークスや造船所、竹内治郎が城の址、其の後黒田の家臣なる、三宅若狭が居りしとぞ。

83 若松町は維新前、三百余戸の小漁村、今は一躍三千余、人口稠密繁盛に、郡中一の大都会。

84 諸官衙銀行各会社、病院鍼業倶楽部あり、三妻安川松本や、富戸商店相競ひ、軒をつらねて賑へり。

85 恵比須神社はその昔、神后此の地を過ぎし時、時に祭らせ給ふとか、神殿美麗宏壮に今も神威は輝きぬ。

86 築港会社の防波堤、長蛇の走る如くにて、浚渫日に進みつゝ、湾内水深いや深み、

40 遠賀六郷のその一つ、数へられたる垣生郷は、その名もしるき羅漢山、三つの窟に今もなほ、安置まします石仏。

41 垣生の渡を打渡り、中間の里に来て見れば旧跡多きの中に、総社篠隈両神社、古来故ある社とぞ。

42 なおも古墳を訪ぬれば、烏節子の岩やわくど岩、人形石に寝醒みず、朝霧黒川御館山、浮殿蓮花蔵王寺。

43 御殿山こそ古の、斉明帝の行在所、元は岩瀬の行宮と、唱えしものぞ般はてし郡の長津とはこのあたり。

44 第三大辻炭坑と、第二香月はもろともに、貝島氏の所有にて、物事すべて整頓し、いと盛大な鉱区なり。

45 世にも名高き堀川の、注水には橋橋の、寿命の岩石掘うがち、設け掘たる石唐戸、千代も朽せぬ功なり。

46 始から圃たず見えて、滄桑の感いやましぬ香月の里は旧跡の、いと多かる所なり、いざあげて見ん二三つ。

47 里の名義は日本武、神の尊の花かおり、月も清しと宣ひし、御言のまゝに名付たる里の匂ぞ香ぐわしき。

48 香月の君の遠祖は、小狭田の大人か日本武神の尊をしたひつゝ、此処に祀りし杉守の神の社の栄えゆく。

49 七堂伽藍二十四の、僧坊ありし勝福寺、其盛時こそ忍ばれ、又浄土宗吉祥寺、勝光聖の開基とぞ。

50 畑の城跡は、近隣に威を振いたる香月氏、庄司秀則居りしとぞ、其後盛衰時ありて、天正年間亡びたり。

51 尺の御獄は日本武、西征の時登臨して、石に御文を比べます、その跡とかや見渡せ

87 林立したる櫓は、矢だに通らぬ心地して、千帆朝夕往来す。つなぐ櫓は数知れず、げに石炭の集散地。

88 金比羅山は内外に、海を眼下に西東、風光明媚えも言はず、麓に連なる鉄道は、これぞ若松停車場。

89 修多羅の里の連歌浜、十三塚に経塚や、大庭の隠岐が墓を訪ひ、西に向へば鳥郷のいざ村々を廻り見ん。

90 浜田の城址高塔や、麻生の宅の址もあり、此処に麻生兄弟が、力を合わせて兵をあげ仇を報ひし古戦場。

91 小石は一名越石なり、石峰山は鳥郷の、第一の高き山、異国警備の烽火台、竹森氏の墓もあり。

92 此処を下れば脇之浦、山路を越えて藤の木、の、里の赤岩跡のみぞ、稍残りつゝ、清潔の泉は猶も湧きにけり。

93 立ち並びたる二子島、日吉神社は御笠郡、観世音寺の鎮守にて、村も昔は此の社の、所領なりと云ひ伝ふ。

94 花房山は畠田の、村を距ること二十町余、二反余りの平地にて、麻生遠江が城址ぞ、長福寺廢寺の址もあり。

95 小竹は元来小岳にて、白山神社は麻生氏の、下野国宇都宮、白山神社を勧請し、上宮とこそ唱へけれ。

96 熊野神社は下宮にて、此れも麻生の再興ぞ本社昔は大社にて、寺僧坊八区十三寺、奇異の古鐘も今もあり。

97 頼田竹並弘川、魚鳥の池は神后の、御船進まず熊鷹が、恐れかしこみ掘りなし、慰めまつる跡とこそ。

98 洞の海辺に篋住みし、浦は田畑と変れども

ば、郡下の村は目の下に。

52 此の地山川秀麗に、いと仙境の思ひあり、下ればやがて小嶺なり、西に見ゆるは太閤の、いこひ給ひし茶屋の原。

53 上上津役は古の、いわゆる夜久の駅のあと東に見ゆる竹尾は、麻生左衛門鎮里の、居城の址と知られたり。

54 牙々とそびゆる市瀬、坊主山の名は多し、杉山又は矢善山、僧坊多くありしゆえ、此の名は特に顕れぬ。

55 鷹見神社は慶雲の、二年三月小角が、紀伊の国より奉迎し、此処に祭ると云ひ伝へ、今も神威ぞ新なる。

56 里の南の山の上に、四段ばかりの平地あり、香月三郎則村が、初めて築きし城にして、後に麻生のものとなる。

57 又東なる古岩址は、彼の藤原の純友が、岩の址と云ひ伝へ、草むら深きその中に、礎石点々と残りけり。

58 金円王の宅の址、今はかすかに成り行きぬ名前の原や安支野、下上津役を打過ぎて、暫く憩ふ永大丸。

59 里の東の園田うら、麻生近江が城址なり、北に廢寺のあとも見ゆ、さて則松の温泉は其の所より程近し。

60 いざ立ち寄りて入浴せん、正願給への真清水の、名に違ひなく諸々の、病を治す効あれば、浴客常に賑へり。

61 名に流れたる堀川は、黒田長政入国後、自ら地形を察せられ、元和の工を起せしも功ならずして止にけり。

62 此より其の後六代の、孫にまします継高君遺志を継ぎつつ宝暦の、初年に此れを起工して、其の十二年に功なりぬ。

63 硫サクの蹟は天工に、出たるかとぞ疑はる

其の里の名は残りつゝ、げにも安屋や脇田浦、彼の洞山はかげにけり。

99 雌雄の白鳥睦まじく、立ち並びたる有様は奇峰絶巒類なし、此れぞ毛利の元就が、此の浦人に賜ふとぞ。

100 有毛の野辺の百合草は、紅の花びら十四五の、花を開きておえつくし、近き隣の乙丸は、多の乙磨居たとかや。

101 此処に名高き壽命貝、肉を食いしその人は六百年の令をぞ、保てりと云ふ物語り、今も記して伝えける。

102 麻生岬や岩屋浦、これを東に越えゆけば、白山神社の大鳥居、ありし所は里の名に、椎木洩も猶残る。

103 小敷は昔白山の、御饌ととのふるこしきをぞ、掛けて畏き神后の、跡を慕ひて太閤が、堀りし泉は潔よし。

104 やら尾のつゝじ子忘橋、見かへり松も枯果てて、塩屋に立ちし烟さへ、今はとだえて跡もなし、移り変れる世の様や。

105 高須は古高洲とぞ、書けるもうべや水荖の岡の湊の潮汐とぞ、芦屋と東若松の、間にそそぐ洞の海。

106 延享三年此の土地に、土手を築きて開墾し寛延二年に成功し、宝暦三年農民を、此処に移せる御開。

107 源朝臣参河守、範頼平家を討として、其の本城を此処に築き、香月山鹿と戦へる昔の跡を忍びつゝ。

108 廻り来りし学校の、数は尋常三十二、高等小学九校にて、生徒合せて一万余、何れも進歩に驚けり。

109 さて高等の教育は、東筑中学此処にあり、やよ人々よ近きより、遠き所にいや進み、高き譽を世にあげよ。 以上

かかる工事は他国にも、いと稀なる奇観なり、その功こそ雄々しけれ。

64 御輪池鯉口吉田坑、各所に立ちたる煙突は常に煙のたえまなく、炭車の音は賑ひて、礦業いと盛んなり。

65 岩瀬は古来有名な、駅路の址ぞ岩尾にも、猶もその址残りけり、斉明帝の行在所、今も中間に属しけり。

66 大膳堀の古き跡、尋ね求めて行く程に、いと疲労を覚ゆれば、堀川つたひ杖をひき、記念碑畔に帰り来ぬ。

67 暫く足を休めつつ、廻り残りの村々を、又尋ねんと立ち出でて、昔を忍ぶ陣の原、井上周防の宅の址。

68 玉章院弘善寺、大永中の開基にて、井上周防再興す、元房夫婦の影像や、夫人の墓も有りにけり。

69 熊手一名菊竹は、南の山のみもとまで、潮水入りし遠干潟、宝暦十二年の新開き、二十三町六段余。

70 此処も旧蹟いと多し、御手洗清水躍石、錢屋圃に太刀洗、十三塚や三神山、帆柱山の城の址。

71 岡田神社は神武帝、一年在りし所とぞ、天皇屋敷鳴水や、内藤陣山時枝の、重記夫婦の墓もあり。

72 黒崎城は長政の、入国以後に築かれて、井上周防元房を、此処の守りに置かれしも元和の命にしまれつ。

73 花尾城は宇都宮、上野介重業が、始めて城を築きつゝ、子孫代代麻生氏と、名のりて此処に住ひけり。

74 上に登ゆる皿倉山、坊主山の東面、此処に登れば壱岐対馬、遙に見ゆる防長や先ず目にはいる下関。